

『大山不動靈驗記』における靈驗主の考察

飯田隆夫

【抄録】

相模国の古義真言宗寺院の大山寺には、一五三二（享禄五）年の仮名本『大山寺縁起絵巻』と一六三七（寛永十四）年の真名本『大山縁起』の他に一七九二（寛政四）年『大山不動靈驗記』が存在する。後者は全15巻に及ぶ大部の靈驗記である。この靈驗の内容に関して圭室文雄・川島敏郎氏らの先行研究で説明されてきたが、靈驗主に焦点を当てた分析は行われておらず、本論はこの視点から検討する。キーワード：不動明王、石尊権現、複合靈驗主、不動剣と木太刀

はじめに

相模国大山には、一五三二（享禄五）年『大山寺縁起絵巻』^①と一七九二（寛政四）年『大山不動靈驗記』^②が存在する。縁起と靈驗とは近似した用語であるが、辞書の定義では縁起は「③社寺、仏像、宝物などの由来、または靈驗などの伝説。また、それを記した文書」、靈驗は「①神仏の通力に現われる靈妙な驗。神仏の不可思議な感応。祈願

に対して現われる効驗。利益。利生」と説明される^③。この近似する用語に関し宮次男は「社寺縁起と靈驗説話」の中で、(1)社寺の草創の由来を、本尊・祭神の靈驗説話と関連させて描いたもの、(2) (1)の内容に本尊のご利益、すなわち利生記を合せ加えたもの、(3) (1)の内容に寺の歴史を利生記に関連させながら描いたもの、(4) 草創の記は簡略で、本尊・祭神の靈驗・利生記を詳しく描き出したもの、(5) 特定の社寺に関するものでなく、地藏・不動などの靈驗説話を主題にしたものと定義されている^④。宮次男の定義にそえば『大山寺縁起絵巻』は(1)に、「大山不動靈驗記」は(4)に該当するのが相応しいかと思われる。本論では寛政四年『大山不動靈驗記』の検討を試みる。

『大山不動靈驗記』に関しては圭室文雄の『大山不動靈驗記』に見る大山信仰^⑤の研究と川島敏郎「古記録からみた大山信仰の諸相―『大山寺縁起絵巻』・『大山不動靈驗記』―」の後継研究^⑥がある。圭室文雄の研究は、①この靈驗記の著作目的は大山信仰が現世と来世に利益をもたらし、その靈驗を民衆に平易に紹介する案内書であること、②靈驗記の作成された時期・地域分布・登場人物の特徴を指摘し、③

特に病氣治し・火難除け・田畑の災害除け・盗難除け・来世往生など
 靈験を検討した点で非常に意義深い。川島敏郎は、圭室の研究を一層
 細密にし『大山不動靈験記』に「釈文・解説」を施し、神奈川県立郷
 土資料デジタルアーカイブで近年公開した。

不動靈験記のご利益内容や作成時期、靈験対象はすでに明らかにさ
 れてきたが、靈験主体に焦点をあてた分析はこれまで皆無である。本
 論は、靈験主の検討を通じ本縁起の特徴を探ることを目的とする。

『大山不動靈験記』（以下靈験記と表記）の版本全15巻は、現在、神
 奈川県立図書館地域資料室、国立公文書館、厚木市立郷土博物館など
 に所蔵が確認されているが、本稿では国立公文書館本によった。

一 靈験記の自序と第1巻

靈験記の著者は大山寺供僧寺院一つ元養智院の心蔵である。この筆
 者は冒頭の「自序」で大山不動信仰により利益を得た伝承を集めたも
 ので、不動明王の信仰心が篤ければ必ず叶えられると強調する。⁽⁸⁾

第1巻は6話構成で標題は以下である。1話の前に門前町、結界地
 入口の前不動、中腹・山頂の山容図が3丁ある。()内は筆者注。

- 1話 開山良弁僧正伝（生没年六九八〜七七三）
- 2話 中興開山願行上人伝（生没年一二一五〜一二九五）
- 3話 大山寺造宮御修理年時（一六〇五〜一七七七年）
- 4話 御代々御朱印（一一八四年九月源頼朝〜徳川家治代の御朱印）
- 5話 御祈禱年中行事 大堂塗札之写

6話 大山事紀⁽⁹⁾

「大山事紀」は、神武・景行・清寧・推古・聖武・孝謙・醍醐天皇の
 代、阿夫利神社が崇敬され、中興の願行上人が鉄製不動明王を鑄造し
 たことで大山不動信仰が歴史的に確かであることを説く。この書は大
 山寺縁起の神仏関係を歴代天皇を引合に出し詳述した。その上で「神
 は靈石にして、即ち不動の応、即ち、不動の用なり」と山頂と山腹に
 位置する阿夫利神社と大山寺との関係を示す。心蔵は末尾で「因み
 に」として「大山事紀」は当山に古く伝わるが作者不明とし、「大成
 教・先代舊事本紀・神皇本記に相似タル事アリ」と指摘する。その上
 で阿夫利神社は本迹縁起神道による両部習合神道の祭祀を専らとし、
 唯一宗源神道とは異なると注意を促している。

二 靈験主体とその内容

第2巻から第15巻までが靈験譚の内容で全125話である。
 これらの中で、第4巻26話の武田信玄娘、第10巻75話の曾我兄弟、
 第7巻60話の信州善光寺などは不動明王、第8巻69話は相模国善波太
 郎と石尊権現、第13巻100話は大山寺草創記の宮大工明王太郎の歴史的
 説話につきこの5話は分析対象から除く。これら以外の120話の靈験譚
 にはどのような靈験主が登場するのか、また靈験主は単体か、複合か
 の点を探ってみる。最初に単体靈験主の三種を取上げるが長文に及ぶ
 のでその枢要部分を紹介する。⁽¹⁰⁾

(1) 単体靈験主の靈験

1 不動明王

第2巻1話「相州寺田繩村三明和尚愚根ヲ轉シテ智恵ヲ得シ事」

(話番は、第2巻から第15巻までの通し番号で表記する)

相州大住郡寺田繩村吉祥院第十三世三明和尚ト云人アリ、
生得魯鈍ニシテ百度學ンテ百度遺レ右ニ聞テ左ニ忘ル、事世ニ
類ヒナキ天性、(中略) 享保十二丁未ノ歳九月十日大山不動ノ寶
前ニ詣シ七日七夜斷食、(中略) 翌年ノ三月六日ヨリ同ク十三日

迄又此所へ詣デ、斷食シ信心堅固ニ祈ラレケル所ニ同ク十二日意
願滿ズル夜籠リ所ニ坐シテ誦經セラレケルガハヤヲシツケ夜モ
黎明ニ至リテ夢トモナク現トモナク七尺有余ノ大入道ノ形ニテ
右ノ御手ニ利劍ヲ提ケ立出給ヒテ汝ヲ能モ来リテ我ニ利根智慧ヲ
祈ルヤサシクモ濟度利生ノ意ヲ勵シヌル者カナ、汝其願ヒヲ成セ
ント欲セバ此利劍ヲ吞ベシトテ指出シ玉ヘドアマリノコトニ膽ヲ
潰シ恐レ戦キ居ケル所ニ利劍ヲ擡ゲテ疾々吞ベシトテ口ヨリ喉ニ
サシ入玉ヘバ、ワツトバカリニ大聲アゲテ遍身大汗ニナリテ呼叫
號ビケレバ何地トモナク見ヘサセタマハデ籠リ所ノ畳半デヨウ程
ノ所ヘ黒血ノ堅マリアル物ヲ咄出シケリ、(中略) 寶前ニ立帰リ
意願成就ヲ悦ビ厚ク誦經拜謝シ已ニシテ自坊ニ歸ラレケルガ其
ヨリ俄ニ敏悟卓絶ニナリ慧解衆人ニ超テ彌々勤學懈ラザレバ、
(中略) 此事三明和尚ノ遺弟全見和尚ハ余ガ知己ノ人ニテ月參セ
ラレケルヲリカラ子ガ寺ニテノ物語リヲ詳ニ聞テ記ス

この靈験譚は、一七二七(享保十二)年九月十日、相模国大住郡寺

「大山不動靈験記」における靈験主の考察(飯田隆夫)

田繩村の愚鈍僧の三明が大山寺に參詣し本堂で斷食中に不動明王の劍
を呑み黒血を吐く夢を見、以後、知恵を得た靈験を全見和尚から筆者
の心藏が聞書した内容である。寺田繩村は、相模国大住郡にあり戸数
五十三、曾根道と大山道に係る村で、吉祥院は村内の曹洞宗寺院であ
る。だが、いつ、どこで、どのような靈験を、だから聞いた靈験
なのかを、具体的かつ詳細に描かれている。こうした靈験は120話中に
113話(94%)に達する。不動明王単体の靈験はこの他に全部で69話あ
り最多である。

2 石尊権現

第5巻40話「上野国桐生村與右衛門途中ニテ石尊ノ御櫃ヲ得シ事」
宝曆八年寅ノ四月上野国桐生松村ノ名主與右衛門僕一人召連テ同
国春名山へ參詣シテ夫ヨリ下野ノ伊香保ニ到リテ入浴セント思ヒ
道ヲ急ケルガ、驟ニ天搔曇リ大雨降荒ミ雷聲地ヲ動シテ邊近ク落
ケレハ頭モ碎クバカリニ膽魂ヲ失ヒテ地中ニ沈ム心地ナレバ唯一
心ニ石尊ヲ念ジ災難消除ヲ祈リ家頼モ共ニ合羽ヲ蒙リテ臥居タ
リ、殊ニ其路次ニハ晝食スベキ茶屋モナク朝トク食セシ計ニテ夜
ニ入ケレバ飢疲レ一方ナラザル苦ニ逼リ殆悲シカリケル(中略)
空晴星モ見ヘ給ヒ路ノ邊ヲ見廻セハ素器ノアリシ故手ニ取能々見
シ所ニ江戸八町堀ノ紙屋何某ヨリ安産ノ祈禱ノ為石尊権現ヘ獻シ
奉ルト書印シ内ニ御供ノ干飯ノ有シサマ臙臙ニ見ヘケル故先取
アヘズ押戴キ兩人是ヲ食シケレバ少ノ供物ニ飢ヲ忘レ漸
頃伊香保ニ到ト也

上野国桐生松村の名主右衛門が、下野国伊香保村で雷に遭遇し空腹に耐えかねて石尊権現に祈ったところ江戸八町堀の紙屋某が納めた御櫃により命拾ひした靈験である。石尊権現単体の靈験主は他に27話ある。この靈験譚は病氣に関するものが7種、火難・水難その他の利生が28種である。

3 天狗

第11卷85話「相州荻野町ノ伴七ガ家ニ天狗ノ来リシ事」

相州荻野町ノ新宿ニ伴七ト云フ者アリ、安永九年子ノ九月上旬ノ頃時候ノ痛ミニヤ四五日熱病ノゴトク煩ヒ医薬効シナキ故ニ其家代々日蓮宗ナレバ同國古澤村ノ本照寺ト云経宗ノ住持ヲ憑ミ病氣本復ノ祈禱ヲナシケレバ頻ニ物狂ヒテ體ニミヘテ口バシリケル、(中略) 本照寺ノ云ク物付野狐放チ等ノ祈禱ハ當宿本郷ノ戒善寺ヲ頼ミテ祈禱セラレヨト云テカエラレケル、(中略) 家々ハ寂然トシテ音ナキニ家内宛モ地震ノゴトク鳴渡家人大イニ驚キシガ病人ハ心地能熟睡セシ、(中略) 戒善寺ハ是定メテ天狗ノ知セニシテ離去タルモノナラン、此上ハ病人全快疑ヒナシトテ其夜モ又熾盛心ニ祈念ヲナシ明朝行テ病體ヲ見ルニ夢ノゴトクニ熱モ醒身體堅固ニ平癒スルコトヲ得タリ

天狗によるご利益の靈験は、他に92話と94話にある。

心藏は後段で、「我等ゴトキハ天狗ノ事量リ知ルトコロ非ラストイヘトモ」と前置きし『役行者靈験記』『雑法華經』『大日經疏地藏經』他多数書を取上げ、これらは「飯綱毘那夜迦」に基づき「出家ノ禪定

ヲ修スルニ菩提心ナク高慢貪瞋破壊ナレバ魔道ニ墮ス悪書」と断じ『尊勝陀羅尼』さえ誦すれば魔道の苦患を逃れるとする。

以上三靈験主を紹介したがこの他には地藏菩薩(57・58・122話)、神仙(54話)、第六天(86話)などあるが紙幅の都合上割愛する。

(2) 複合靈験主の靈験

単体靈験主は以上であるが、複合靈験主では全部で22種あり、その中の4例を次に紹介する。

1 不動明王と石尊権現

第5卷43話「江戸湯島原木工右衛門ノ息眼病平癒ノ事」

安永五丙申年春ヨリ秋ニ到ル迄諸國ニ麻疹流行シテ群民ヲ傷損セシ時、江戸湯島御手代町ニ原木工右衛門ト云武士ノ一子勘次郎トテ今年十歳ニ成ケルガ五月六日ヨリ彼風疹ヲ煩ヒシガ毒氣両眼ニ入テ種々医薬ヲ用ユト雖其験シナク六月始ヨリハ両眼更ニ見ヘワカズ、(中略) 同月廿三日ヨリ一七日断食シテ大山不動石尊へ眼病平癒ノ祈誓ヲ掛シガ廿八ニハ殊サラ念シ奉リ勘次郎ヲ伴ヒ下谷ノ医師ノ方へ往ケルガ途中ニテ人品高キ武士に行逢シニ木工右衛門ニ向ヒ云ケルヤウ其ナル少人ハ御子息ニテ在ヤ御眼病ト身請侍ル、サソヤ難儀シ給ヒツラン、是ニハ相應ノ御薬アリ、近邊ノ御歴々ニテ溝口家ノ御薬ヲ用ヒ給ハバ極メテ全快有ト告ケル、(中略) 木工右衛門ハ家ニ帰り妻ニ斯ト語り合、是誠ニ石尊不動ノ御告ナラント思ヒ即刻溝口ノ御屋鋪ニ到リ御薬願上ケレバ御許答ア

リテ病體委細ニ御尋子有テ御葉ニ貼給リケル故早速帰リテ用ヒケレバ左ノ眼余程心能テ右ノ方モ曇リノ晴ルヤウニ覺ヘシガ都合御葉六貼ニテ両眼本ノ如クニ癒ケレバ親子ノ歎ビ限りナク誠ニ石尊不動ノ御加護ニテ

不動明王と石尊権現の加護により眼病が平癒した靈験譚である。この類話は他に5・12・22・49・91・104話がある。

2 石尊権現と十一面観音

第5卷38話「下野國莊藏ガ妻疫病頗ニ平癒ノ事」

下野安蘇郡佐野領秋山村ニ庄藏ト云者アリ、明和四年乙亥ノ夏疫病荐ニ流行シテ群民多艱彼庄藏ガ妻熱病ノ實ニ臥テ苦痛更ニ止ザリケバ庄藏ハ此彼ノ僧ノ許ニ行救濟ノ法ヲ頼ミ種々折袴医藥ヲ用レト熱更ニ去ザレバ此者從來石尊信仰ナレバ願書ヲ認メ千垢離ヲトリ大願ヲ起シ折念スラク抑石尊ノ御本地十一面観音ハ悲願餘尊ニ越テ殊更疫病退治ノ為ニ十一面ヲ現ジ給フト聞、大悲ノ本誓差事ナク立地ニ苦濟シ給ヘト心願ヲ籠祈ケレバ漸半時バカリモ過ケル頃夢中ニ臥ケル病人齋跳起坐シナガラ聲ヲ忿ラセ高聲ニ云ケルハ我ハ石尊ノ使者ナルガ汝ガ信心深ニ賞テ今度汝ガ妻ノ必死ヲ延助クル也ト驟シク申ケレバ看病ノ人々思ヒケルハ熱ノ為ニオカサレシ謔言也ト思ヒシガ夢ノ如クニ熱モサリ常ノ如クニ平癒セリ

この靈験は一例のみで、疫病退治にご利益を發揮する十一面観音が石尊権現の使者として現じ庄藏の妻の疫病を退治した靈験である。靈験記の中で唯一、石尊権現の本地を十一面観音と描く靈験譚である。

3 不動明王と地藏菩薩

第9卷73話「相州中里村由松ガ身替ニ立給ヒシ事」

往時元祿何中相州足柄下郡中里村ノ百姓源左衛門（中略）大山不動ヲ信ジタテマツリ月毎ニ參詣ス、（中略）汝ガ壽命ハ今日際リ水ニヨリテ死スル由、不動明王板橋ノ御堂へ来リ給ヒ地藏菩薩へ告給ヒシ御言バ胆ニメイジテ忘レネバ何卒ニ尊ノ御慈悲ニテ壽命ヲ延シタビ給ヘ

不動明王と地藏尊を深く信じた源左衛門が地藏尊の身代わりにより延命した靈験譚であり、二尊複合の靈験例は他に76話・79話がある。

4 神仏6靈験主一体

第9卷106話「石尊社消失ノ事」

過シ享保四年巳亥ノ三月二十五日ノ頃ヨリ日夜降続キテ四月四日迄雲霧峯ヲ覆降雨雹岳ヲ侵シケルガ俄ニ本宮五社同時ニ炎上セル、（中略）七尺余リノ大太刀ヲ杖ニツキ火繩ニ火ヲ燈シタタルヲ持添テ下リ（中略）五社ヲ焼失ストイヘ供我曾テ一人ノ所為ニアラズ、不動石尊大天狗小天狗雨風徳一其外一山ノ諸神列席ニテ我ニテ焼シメ給フ、必ズ天ヨリ御普請有ベシ

この靈験譚は、一七一九（享保四）年山頂の火災で消失した石尊権現社の史実を題材にした靈験譚である。複数の神仏による複合靈験譚はこの他109話がある。

(3) 靈場の二所参詣地と靈験主

大山の山岳靈場には、不動明王を安置する大山寺や十一面観音を納

める本地堂、地藏堂、第六天社はいずれも霊場中腹に建つ。本堂裏に大山山頂に通ずる鳥居が立つ。この登山口から石尊権現の例祭(開帳)が行われる山頂への参詣は、毎年六月二十七日以降七月十七日までの二十日間の間、庶民の参詣が認められていた。山頂には阿夫利神社である石尊権現と近傍に大・小天狗社、雨風社、徳一社がある。⁽¹⁵⁾ 前町坂本町最奥の前不動より山頂までの霊場は、清僧支配の結果地中で中腹の不動明王と本地堂他末社が多数を占め、山頂に石尊権現と大・小天狗社他の摂社が参詣の対象である。

第2〜15巻の霊験譚120話を数量的に整理すると、霊験主単体では不動明王63(52・5%)、石尊権現28(23・3%)、地藏菩薩3、天狗3、神仙1、第六天1である。霊験主の複合では不動明王+石尊権現7、不動明王+地藏菩薩3、石尊権現+十一面観音1、不動明王+稲荷1、不動・石尊・大天狗・小天狗・雨風社・徳一社の寺社六尊2となった。不動明王が過半数を占めるが、石尊権現は単体・複合で35話(30%)に達し不動明王に次ぐ。これ以外に僅かであるが地藏菩薩、天狗、神仙、第六天が登場する。不動明王を冠する霊験記ではあるが、内実は複数の神仏霊験主による霊験である。

三 不動剣と石尊権現の木太刀

霊験記には不動剣(右手)・縞索(左手)の霊験が6話、石尊権現の木太刀に関する霊験が7話登場する。両剣の霊験を比較してみる。

(1) 不動剣によるご利益

第2巻1話の「相州寺田繩村三明和尚愚根シテ智恵ヲ得シ事」は霊験記の最初に置かれ、不動堂の修行中に夢で不動明王の右手の剣を呑み吐血した結果、知恵を得たという不動剣の象徴的霊験譚である。⁽¹⁶⁾ これと同様の霊験が2話の「相州矢崎村円應弟子見明同ク智慧ヲ祈リテ得タル事」である。愚鈍な僧が不動剣を呑んで知恵を得たとする説話は除靈伝説で有名となり、増上寺大僧正に栄達した浄土宗僧祐天の『祐天大僧正御伝記』⁽¹⁷⁾にもみられる。

俄かに一丈斗りの不動尊体とあらわれ、御身より火をえんを出し、左右の御手に長短の利剣をひつさげ(中略)我こそは不動明王なり。汝丹精の念力たぐひなきをかんじ、今あらわれてしめす也。

(中略)祐天勞れながらもつゝ、しんでいわく、短を呑も長を呑も呑む同じ躰を破らん事に二ツなし。我長きを呑んと大口をあき給はば、忝くも不動尊、呪を唱へ給ひて。右の御手の長き剣を情けなくも祐天の御口へ、ぐつとさし込給へば、わつといふてうつむきに其ま、息はたへにける。

この呑剣説話は他に天性愚鈍であった総州生実大蔵寺の開山道誓が夢中で不動明王による呑剣を体験し、以後大徳智人となった霊験譚が元禄十三年「成田山新勝寺本尊来由記」(状)にもある。⁽¹⁸⁾

呑剣譚ではないが不動明王の利剣に関わる霊験の類例は15話と17話の二話がある。不動剣によって盗難品が戻ったり、腫物が治癒したご利益である。不動明王の縞索による霊験は、46話と90話にあり両話とも病氣平癒のご利益譚である。

(2) 石尊権現の木太刀によるご利益

第5巻36話「江戸京橋彦兵衛火難ヲ遁レシ事」

安永元年辰ノ二月廿九日ニ江戸目黒行人坂ヨリ火事出テ折柄風ハゲシク吹散シケル、戻火本郷菊坂ヨリ焼来リ、愁烟肝ヲ焦スバカリニテ彦兵衛モ今ヲ限りノ折節ナレバ日頃石尊信仰ノ者故早速身ヲ清メ石尊ノ木太刀ニ向ヒテ風ニ聞石尊権現ハ□妙ヲ論ゼス利生章ニ在ス事ナレバ我此度ノ火難一切ニ遁シ家内安穩ニ御助アレト唯一心ニ息モ絶ルバカリニ神号ヲ唱ヘ木太刀ヲ持テ火ノ方ニ向ヒ扇ギケレバ奇ナル哉斯迄強キ南風俄ニ吹変リテ家内恙ナカリケレバ彦兵衛ハ限ナク歎ビヌ

この靈験は、一七七二（明和九）年二月二十九日に発生した目黒行人坂大火に仮託した石尊権現の木太刀の靈験である。この類話は37話と61話にあり火難回避の靈験であるが、次の3話は火難以外のご利益に関する靈験である。

3話「下野国赤見村義右衛門石尊ヨリ迎シ木太刀ノ事」（大願成就）

7話「江戸本所亀井戸八右衛門ガ屋敷ノ畑ヨリ石尊ノ木太刀ヲ掘出

セシ事」（御神体としての木太刀）

98話「相州小田原領ノ者勘当セシ子在家石尊ノ木太刀ヲ得テ知シ事」（勘当息子の救免）

(3) 不動明王の羅索と石尊権現の木太刀が聚合したご利益

第12巻91話「相州喜兵衛病犬ノ難ヲ遁レシ事」

翌安永元年辰ノ年彌生半ノ頃同國下島ト云所ノ親類方ヘ喜兵衛一人

「大山不動靈験記」における靈験主の考察（飯田隆夫）

行ケル路ノ向フ方ヨリ病犬ヨト叫リ罵リテ一隻ノ病犬飛ガゴトクニ見ヘケルヲ許多ノ人々棒ヲチギリ木ヲ提ゲ驟ク追来レ、（中略）不動尊ヲ念ジテ災難消除ヲ祈リシカバ（中略）悪獸ニ逢テ危キ所ヲ遁レシモ石尊ノ守太刀ト不動ノ羅索ヲ守リニ掛シ故ナリこの靈験譚は、不動明王の羅索と石尊権現の木太刀を聚合させて災難除去が叶えられた唯一の靈験である。

1話の寺田繩村三明和尚の吞剣による靈験は、祐天の吞剣説話にみられるような不動明王の象徴的靈験譚である。

他方、石尊権現の木太刀の靈験譚は大山參詣に見られる特有の習俗である。靈験記は、不動剣を通じて中腹の本尊不動明王（大山寺）による靈験を、木太刀を通じて山頂の石尊権現（阿夫利神社）による靈験をそれぞれに反映したといえる。

祈願対象が相違する奉納木太刀が次の二例である。

寛政六年（一七九四）川越市松江町自治会所有木太刀表面の銘文「大山大聖不動明王石尊大権現大天狗小天狗寛政六甲寅歲六月吉祥日」（全長四四四・一cm桐・黒漆塗）（川越市立博物館蔵）



寛政九年（一七九七）川越市日枝神社氏子崇敬会所有木太刀表面の銘文「奉納石尊大権現大天狗小天狗御宝前」（全長三九五cm松・黒漆塗）（川越市立博物館蔵）



松江町の木太刀には不動明王と石尊権現との連名であるが、日枝神社の木太刀の銘文には不動明王は記されない。この類例の木太刀は他にも複数例あるが山頂の石尊権現に対する参詣の様子を示している。

四 靈験記の取材元・年代・参詣季節

靈験記の内容から取材源は、大山御師18人、僧侶（大山内外）22人、相模国・武蔵国・下野国等の農漁民・商職人・侍など85人からの聞書である。靈験の情報源は、参詣人・僧侶と御師の順である。

巻末表によると靈験記発行の出資者は、地元大山と板戸村の僧侶（大山と江戸）19、江戸商人8、小田原村商人4、金目村住人2、大山御師1の34名で、一冊300疋合計四十二冊出資している。出資者は僧侶と江戸・小田原等の商人が主である。これら靈験記の情報源と出資には僧侶の働きかけが大きい。

年代別では、元禄期3、正徳元1、享保期4、元文期2、寛保期5、延享期4、宝暦期10（8・3%）、明和期30（25%）、安永期42（35%）、天明期4、寛政期7の12話となる。年代不明分を除き宝暦期・明和期・安永期に集中する。宝暦期以降に靈験譚が増加する時期、宝暦二〜六年の五年間、相模国・武蔵国・安房国・上総国・下総国の五か国を対象に御免勸化の巡業が実施されていてこの勸化が関係するとみられる¹⁹⁾。

宝暦期以前の靈験譚は125話中24話（19%）である。これらの内容は中世説話（1話・26話・75話）や近世中期の説話から靈験の素材が得られている。登場人物、時期、靈験内などが具体的・詳細に描写されたな記述は、この御免勸化による諸国巡回から得た情報が靈験譚に活かされたと考える。

靈験譚の月別数は1月4、2月3、3月8、4月5、5月4、6月9、7月10、8月7、9月3、10月3、11月7、12月2、季節別数では春19、夏9、秋3の合計96件で、月・季節の不明は24である。山頂への参詣可能な6〜7月に夏分を加算すると28件（判明時期の29%）、4〜5月に春分を加算すると同じく28件となる。

6〜7月は、山頂の石尊権現への活発で、一年中で大山参詣が最も賑わった季節である。これらの時期に靈験譚が集中するのは、参詣の実態を反映したといえる。

おわりに

『大山不動靈験記』を靈験主の分析を検討し次の点を明らかにした。
1 靈験記は、従来不動明王による豊富な利益が紹介されていたが、じつは不動明王に限らず石尊権現、地藏菩薩、天狗、神仙、第六天など神仏の単体・複合靈験主で構成されている。

2 不動靈験記120話を単体靈験主と比較すると不動明王63話（52・5%）、石尊権現28話（23・3%）と両尊で75・8%と全体の八割を占める。この靈験にまつわるものは、不動剣と木太刀であり、神仏の靈

験を投影した顕著な特徴である。靈験記の年代別では、宝暦期・明和期・安永期で68・3%に達し、当時の参詣実態を示している。

3 山頂の参詣対象である石尊権現の「大山事紀」に対しては唯一宗源神道に因らないこと、天狗による靈験は『役行者靈験記』『雑法華經』などに依らないことを敢えて明記した理由は、山頂登山で賑わう石尊権現に比し、不動信仰の帰依に対する強調意識が作者に強く働いていたのではないかと推測される。

4 具体的に詳述な靈験譚は、宝暦期に実施された御免勸化の実施により得られた情報が生かされ、同時に靈験対象地域から参詣者を募るための宣伝効果を図ったと捉えられる。

5 靈験記作成の直前の明和期、大山寺住職の交代や門前町内の争論が起きていたようだが、寛政四年当時、靈験記がなぜ作成されたかの検証は今後の課題とする。

注

(1) 大山寺縁起には、享禄五年仮名本『大山寺縁起絵巻』と寛永十四年真名本『相州大山寺縁起并明王太郎来由』の二種類がある。仮名本は、良弁が相模国司時忠の子で親子再会后、東大寺別当となり、大山で不動明王を発掘し開山した内容の縁起である。真名本は仮名本の展開を年代・地名・阿夫利神社・登場人物などを特定した歴史的叙述が詳細な縁起である。

(2) 『大山不動靈験記』は、寛政四年の全15巻が神奈川県立図書館地域資料室、国立公文書館、厚木市立郷土博物館等に所蔵。

(3) 『日本国語大辞典』小学館 一九七六年。

(4) 『図説日本仏教の世界』上原昭一・宮次男他編『観音・地藏・不動』集英社 一九八九年 一一一―一三頁。

(5) 神奈川県立文化資料館『郷土神奈川』一八所収 一九八六年。

(6) 『神奈川県立公文書館紀要』第6号(8) 二〇〇八年。川島敏郎の研究は「相州大山信仰の底流―通史・縁起・靈験譚・旅日記などを介して―」(山川出版社 二〇一六年 一九〇―二〇一頁)の中で靈験記の地域分布や登場人物の分析がさらに深められている。

(7) この他には川島敏郎が著書『大山参り』(有隣新書 二〇一七年 九〇頁)で大山先導師の藤間家(茅ヶ崎市)、小笠原家、上神崎家に所在を確認している。

(8) 圭室文雄編『大山信仰』雄山閣出版 一九九二年 一二九―一三〇頁。

(9) 心蔵は「大山事紀」の作者を不明とするが、明王太郎蔵書印(神奈川県立公文書館蔵手中家資料No.92)のある靈験記と同文の「大山事紀」末尾には浄書者と書写者が次のように記載される。

古紀紛紜而無次序、或唯仏、或单神、或俗、或野余思、此有年事務繁穴、空過年月、□正徳三癸己之冬、適乘間艸之仲冬二十五夕浄書之了、云爾開蔵行年四 他日於武都旅寓燈火写之、齡将半百眼晴漸。

(朱筆) 享保十五星□庚戌仲冬之日書写了 痛雅頭俊
開蔵は大山寺の第六世住職で在世時、元禄十五年山法で護摩取次を「正路取次」、享保六年山法で大山御師を「遊民の類」と規定し大山寺と御師との支配関係を強化した。頭俊は子院の一僧。この書の作者は不明である。

(10) 靈験譚は、5丁以内の文が84話(67%)、5丁以上の文が41話(33%)で構成され、長文の靈験譚は3割を越える。

(11) 『新編相模風土記稿』第三卷 雄山閣二〇〇三年 三七―三八頁。

(12) 開書元不明は、8・29・49・73・99・110・111話の7話。

(13) 他に『先代舊事本紀』『日本靈威記』『元亨釈書』『宇治拾遺物語』『明恵傳』『佛神感応録』『杜子美が集』『天狗ノ賦普書』『天文志』もある。山頂には大天狗・小天狗の二社が古来より祀られる。

(14) 大山寺『大山史年表』一九頁 一九八六年。

- (15) 前掲注(11)書 一一七～一一九頁。
(16) 安然『不動明王立印儀軌修行次第胎藏行法』の不動十九相観のなかの一相にあたる(前掲注(4)書一二～二三頁「観音・地藏・不動」)。
(17) 祐天寺研究室『祐天寺史資料集』第二卷 四六七～五六〇頁。
(18) 『成田山新勝寺史料集』第一卷 四二八頁 二〇〇六年。
(19) 寛延四年十月『御触書寶曆集成』十九寺社之部 九四八(高柳真三・石井良助編 岩波書店一九三五年)の次の触である。

相州大山不動別當 八大坊

相模国「武蔵国」安房国「上総国」下総国

右大山諸堂社大破ニ付、修復為助成、勸化 御免、寺社奉行連印之勸化状持参、御府内武家方并寺社町中えは来申三月より戌十一月迄三ヶ年之間、五ヶ國えは来申八月より来ル子十一月五ヶ年之間、役僧共御料私領寺社領在町可致巡行候間、志之輩は物之多少ニよらず、可致寄進旨、御料は御代官、私領は領主、地頭より可被申渡候、十月。

(いいだ たかお 佛敎大学総合研究所特別研究員)